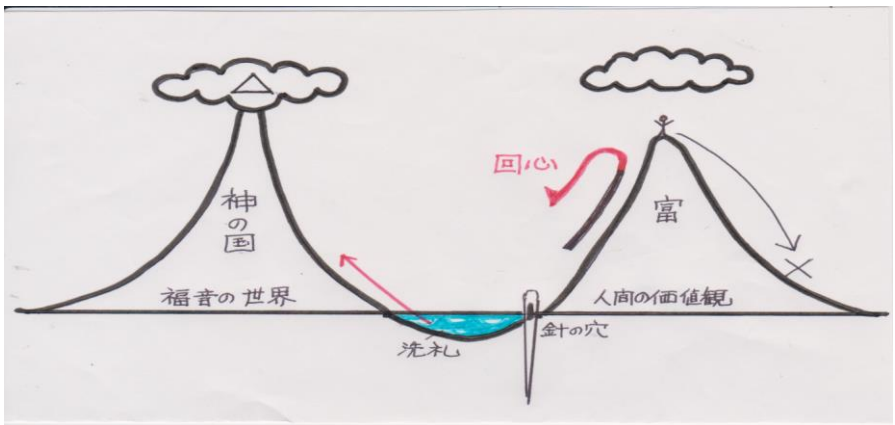
カトリック香里教会　年間第 28 主日　2021 年 10 月 10 日

― 知恵の書７章・7-11、ヘブライ４章・12～13、 マルコ 10 章・17-30―

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」　-マルコ 10 章-

善い神と良い被造物



私は人生を、『価値』を求めて登る二つの山に譬えます。　神を目指す山と、富を目指す山ですが、この世で人は、なぜか富の山を登るのです。「上るほど価値を手にし、頂で神に達する」と。　しかしその頂で、人は悟るでしょう。神と永遠の断絶があることを。すべての努力が水の泡だったと知ったこの人は、絶望の果てに身を投げるのです。「神も仏もあるものか」と。

一方、ある人は、この頂に立って、向こうの山が神に達しているのを見て、自分の誤りに気付き、回心し勇気を奮って、きた道を下って向こうの山を目指します。そして　0 の地点で「針の穴」を通り、「洗礼」の水をくぐり抜けて向こう岸に上がると、そこは全く新しい価値観、神が見える復活の世界なのです。

かつて私は神学生だったころ、マルコ福音書のこの箇所につまずいて目の前が真っ暗になった体験をしました。　「なぜ私を『善い』というのか。神おひとりのほかに善いものはだれもいない」と語るイエスの言葉に、イエスは神ではないのかと疑いが起きたからです。苦しむ中、神の知恵だったのでしょうか、闇の中に光が差し込んで落ち着きを取り戻しました。次のようにとらえることが出来たからです。

「善い」は神お一人。神が創造した被造物はすべて「良かった」。この「善い」と「良い」　すなわち「絶対」と「相対」を混同して青年は、被造物と思っているイエスに「善い先生」と言っているという誤りに気づかせたという気付きでした。

神（善）　　この善（神）と良（被造物）を混同すれば偶像崇拝に陥り
人は、富を善いもの（神）として道を誤るのです。

すべては良かった　＝　○　□　△　×（被造物）

イエスは青年を通してわたしたち人類に、良い（相対）ではなく、善い（絶対）を人生の求めるべき道として諭しておられるのです。”金持ちが神の国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方がまだ易しい“とは、まさに、富に仕える者のたどりつく先は「神不在」であって救いがないと警告しておられるのです。

良いもの、すなわち財産を神の祝福のしるしと考えていた弟子たちの価値観、「それでは誰が救われるのだろうか」と言う驚きに、イエスは「人間に出来ることではないが神には出来る。だから針の穴を通していただくために私に従いなさい」と答え、ご自身が「善い神」であると示されたのです。

2021 年 10 月 10 日　主任司祭　昌川信雄